

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月15日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530703

研究課題名（和文）児童の学習・友人関係形成・学級活動意欲を向上させる学級集団形成モデルの開発

研究課題名（英文）Development of a Classroom Group Formation Model for Raising Student's School Morale with Regard to Learning, Formation of Friendships, and Classroom Activities

研究代表者

河村 茂雄（KAWAMURA SHIGEO）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：40302046

研究成果の概要（和文）：学習や対人関係形成、集団活動にコミットする意欲の向上や、そのための建設的な方法やスキルをモデル学習する効果、学校適応を高めるなどで、児童たちは所属する学級集団の状態の影響を受けることが明らかになった。そして、学校教育の効果を高める学級集団の状態を規定する、学級内に生じている子どもたちの相互作用や学級集団に生起している教育作用は、「学級集団内の教育的相互作用の高さ」と「集団同一視の高さ」の両方が要因として存在することが認められた。

研究成果の概要（英文）：This research found that elementary school students' school morale with regard to learning, formation of friendships, classroom activities, positive methods and skills for raising morale, and school adaptation was influenced by the characteristics of the classroom groups to which the students belonged. Additionally, the characteristics of classroom groups that enhance the effects of school education were determined by examining the educational action that occurs when students interact in classroom groups. Two factors—"level of group identification" and "level of educational interaction in a classroom group"—were taken into account.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：教育心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学級集団，教師の指導行動，学級集団発達，学びあい，ソーシャルスキル，
学習意欲，友人関係，学級活動意欲

1. 研究開始当初の背景

1990年代半ばから、一斉形態の授業や学級活動が成立しない、いわゆる、学級崩壊の問題がマスコミに取り上げられ社会問題となった。旧文部省も1998年に「学級経営研

究会」を立ち上げ、「学級がうまく機能しない状況」を、「子どもたちが教室内で勝手な行動をして教師の指導に従わず、授業が成立しないなど、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が一定期間継続し、学級

担任による通常的手法では問題解決ができない状態に立ち入っている場合」と定義して、実態把握を行った。そのまとめ(註 1)は、問題発生の複合性を強調し、代表的な 10 のケースの報告とその対策を示した。しかし、このような状況に対する学級集団発達の視点での解明には至っていない。このような中で、全国連合小学校長会は、学級崩壊の状態にある学級は、小学校の 8.9%にのぼっていることを報告している(2006,註 2)。つまり、学級集団発達は時間と共に一定の正の方向に向かうだけではなく、いくつかの要因が重なりと負の方向に向かうこと、集団教育という学校の機能が成立しない学級の状態が、日本の学校現場で一定数出現していることがこの調査でも示された。

しかし、1999 年～2008 年までの学術的な研究を概観すると、学級集団発達、学級集団が児童個々に与える影響についての実証研究はとても少なくなり、「学級がうまく機能しない状況」という、学校現場が抱える問題に対して、学級集団発達に関する学術的な知見の提供が乏しいのが現状である。その中で申請者は 220 学級を対象にして調査研究し、学級集団の状態の差が、学級内のいじめの発生数と児童生徒の学習の定着率に有意な影響をもたらしていることを実証的に明らかにした(河村・武蔵,2008a,b,註 3,4)。

「学級」を一つの単位として集団指導する日本の学校現場では、児童の学習は個人的な過程であるとともに、「学級」の影響を強く受ける社会的なものである。学級集団が教育環境として児童相互が互いに建設的に切磋琢磨するような状態と、相互に傷つけあい互いに防衛的になっている状態とでは、児童の学習意欲や友人関係形成意欲、学級活動意欲に有意な差が生じるだろう。今後、対人関係が希薄化した現代の児童が集う学級におい

て、その集団作用が児童の学習や友人関係、学級活動への意欲を高めるような学級集団形成のメカニズムの解明と、それに基づく学級集団形成モデルの開発が課題となっている。

註 1：学級経営研究会 1998 学級経営の充実に関する調査研究(中間まとめ)

註 2：全国連合小学校長会 2006 学級経営上の諸問題に関する現状と具体的対応策の調査

註 3：河村茂雄・武蔵由佳 2008a 学級集団の状態といじめの発生についての考察 教育カウンセリング研究 2(1), 1-7.

註 4：河村茂雄・武蔵由佳 2008b 一学級の児童生徒数と児童生徒の学力・学究生活満足度との関係 教育カウンセリング研究 2(1), 8-15.

2. 研究の目的

本研究は、学級集団の状態を規定する特定の要因が、児童の学習意欲や友人関係形成意欲、学級活動意欲を向上させるのかを明らかにすることだけではなく、諸々の学級集団の要因の相互の関係を検討し、学級集団発達のプロセスに位置づけて整理し、建設的な学級集団形成モデルを提案するのが目的であった。

どのような学級集団の機能を、より効果的な順序と指導行動で形成すればよいのかを実証的に検証し、学級を児童の学習意欲や友人関係形成意欲、学級活動意欲を向上させる集団として発達させるための、学級集団形成のモデルを提案することが目的であった。

3. 研究の方法

本研究は次の 4 段階で研究を進められた。(1)学級集団の状態と児童の学習意欲・友人関係形成意欲・活動意欲との関係、学級集団の状態を規定する要因を、1 学級に対して年間

4回調査し分析した。学級集団の状態として、児童相互の対人関係の状況、小グループの実態、学級内に定着している規範やソーシャル・スキルの内容、教師の行った指導行動の要因を取り上げた。

①調査対象学級は、次の条件に該当した各学年×10学級の合計60学級であった。

・1学級の実際の児童数の全国平均値が27.4人(1998年文部統計要覧)であることを考慮し、1学級の児童数が20人～34人規模の学級とした

・対象となる学級は地域特性が偏らないようにサンプリングした

地域特性----都市部, 住宅地, 商工業地, 農水産地域

②特定の学級だけの抽出になるとバイアスがかかるため、単学級以外の学校で、全学級の協力が得られ、かつ、特定の教科や活動について県や市の教育委員会指定を受けていない学校の全学級を対象とした。

③調査時期は、先行研究で学級集団の形成上変化が大きいと指摘のある学期初めの5月、学級編成から3ヵ月後の7月、夏休みを経て学校行事が一段落する11月、学年末の2月の4時点で実施した。

④調査は研究協力者が分担して学校訪問し、調査・観察を行った。

(2)4回の分析結果を時系列の中で整理し(このとき学級集団の変化を成熟というプラス方向だけではなく、成熟-後退という両方向で整理する)、学級集団のいくつかの発達過程を見出し、その中から目的とする学級集団形成の発達モデルを抽出した。

①データの入力・分析・整理は、研究協力者の協力を得て進めていった。

なお、(1)(2)の調査・分析を2年間継続して行った。

(3)(1)(2)のプロセスを通して、児童の学習意

欲や友人関係形成意欲、学級活動意欲を向上させる学級集団の状態とその規定要因、発達過程を見出し、学級集団形成のモデルを作成した。

(4)(3)で得られた成果を、成果報告書と関連学会発表、論文執筆、著書出版を行い、成果を発信した。

4. 研究成果

研究の成果として、次の3点があげられる。

(1)学級集団の状態と児童の学習意欲・友人関係形成意欲・活動意欲との関係、学びあいの作用と学級集団の状態を規定する要因をもとに、理想となる学級集団の発達過程のモデルを作成し公刊することができた。同時に、学級集団が教育力の低い状態で固定してしまう要因、一定の発達段階から集団発達が後退してしまう要因を実証的に明らかにすることができた。

(2)教師が担任する学級集団の状態・教育作用をチェックすることができる測定尺度を作成し公刊することができた。

(3)3年間の研究成果をまとめた研究成果報告書、学会発表、論文執筆、著書出版を行い、成果を発信することができた。

これらの研究成果は、教師の学級経営の展開の仕方に活用することができ、学級集団の問題の予防にも応用することができる点に意義があると考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

(1)河村茂雄・武蔵由佳 2012 学級集団の状態と教育的相互作用の関係の検討 学級経営心理学研究, 1, 21-31.

(2)河村茂雄・武蔵由佳 2012 学級集団内の教育的相互作用と集団同一視を測定する尺度の作成 学級経営心理学研究, 1, 32-43.

(3)小野寺正己・河村茂雄 2012 学級における教師と生徒との関係研究の動向 学級経営心理学研究, 1, 91-102.

(注)(1)(2)(3)の発効日は2012年2月末日で研究年度内であった。

〔雑誌論文〕(計 7件)

(1)河村茂雄 崩壊・教育力の低下を防ぐ学級経営の進め方 教育と医学NO.697(慶應義塾大学出版会) 査読無 2011 28-35.

(2)河村茂雄 ”中1ギャップ“を克服する学級づくり 教育と医学NO.681(慶應義塾大学出版会) 査読無 2010 29-35.

(3)河村茂雄 子どもを育てる確かな学級経営 教育展望(財団法人教育調査研究所)第56巻第2号(通巻607巻) 査読無 2010 24-29.

(4)河村茂雄 いま, 学校で育てたい対人関係の力 児童心理NO.921「学校でできる対人関係スキル・トレーニング」(金子書房) 査読無 2010 1-11.

(5)河村茂雄 授業を支える学級経営 教育研究NO.1286(社団法人初等教育研究会) 査読無 2009 14-17.

(6)河村茂雄 いま, 学級づくりに求められるスキルとは—現代の子どもたちに対応した学級づくり— 児童心理NO.894「個と集団を育てる学級づくりスキルアップ」(金子書房) 査読無 2009 2-11.

(7)河村茂雄 学級崩壊・授業崩壊の予防と対策 (財団法人)教育調査研究所紀要第89号 査読無 2009 62-63.

〔学会発表〕(計 2件)

(1)会沢信彦・深沢孝之・高坂康雅・原田綾子・赤坂真二・河村茂雄 2011 アドラー心理学による子ども・家庭支援—「共同体感覚」を中心に— 日本教育心理学会第53回総会発表論文集, 68.

(2)伊佐貢一・秦野真一・鹿嶋真弓・石黒康夫・河村茂雄・粕谷貴志 2011 大会準備委員会企画シンポジウム(1)学校づくりを支える学校規模の援助活動, 21.

〔図書〕(計 5件)

(1)河村茂雄 図書文化 学級集団づくりのゼロ段階 2012 94ページ

(2)河村茂雄 図書文化 授業づくりのゼロ段階 2010 67ページ

(3)河村茂雄 図書文化 日本の学級集団と学級経営 2010 237ページ

(4)河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗 図書文化 学級づくり・小学校高学年 2009 30ページ

(5)河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗 図書文化 学級づくり・小学校中学年 2009 31ページ

(注)(1)の発効日は2012年2月末日で研究年度内であった。

6. 研究組織

(1)研究代表者

河村 茂雄
早稲田大学
教育・総合科学学術院
教授
研究者番号: 40302046

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

武蔵 由佳
盛岡大学
文学部児童教育学科
准教授
研究者番号: 70405083

川俣 理恵
早稲田大学
大学院教育研究科博士後期課程
学生
研究者番号: なし

藤原 和政
早稲田大学
大学院教育研究科博士後期課程
学生
研究者番号：なし